

生活文化と居住福祉、その架橋を考える

——住まいの未来へ、関西からの問いかけ

対談

増井正哉

「大阪市立住まいのミュージアム」
「大阪くらしの今昔館」館長



三浦 研

「京都市立住まいのミュージアム」館長・増井正哉氏と、高齢期の住環境など
建築と居住福祉が専門の京都大学大学院教授・三浦研氏が語り合う。

地域コミュニティの衰退によって「共助」が希薄になる一方、

いわゆる「住宅弱者」への公助は限界に直面するなど、

住まい・暮らしの社会的課題は複雑多様に広がっている。

解決の糸口はどこにあり、それを掴むにはどんな視点が必要か。

生活文化と居住支援、両者の知見からアプローチしつつ、

住まいと福祉の間のつながりを考える試み——

都市の歴史、そこに暮らす人々の営みを研究してこられた

「大阪くらしの今昔館」館長・増井正哉氏と、高齢期の住環境など

建築と居住福祉が専門の京都大学大学院教授・三浦研氏が語り合う。

加藤しのぶ「取材構成」
宮村政徳「撮影」

再現された裏長屋に立つ増井氏（右）と三浦氏（左）。間口が狭く、奥行きが深い宅地が有効に活用され、住人同士の人間関係も今よりずっと濃密だった。

住まいと暮らしはどう変わったか 福祉の視点からの問題提起

三浦 今日、生活文化と居住福祉の架橋を考えるというテーマをいただいています。私の専門は人の行動や心理に基づく建築・施設設計の研究です。グループハウスの設計・建築などにも関わっておりますので、居住福祉という側面からお話ができるかと思っています。

増井 私のもとで大学で都市史や歴史的な町並みなどの保存・活用の研究をしていました。2021年からは、大阪の人々の住まいと暮らしの移り変わりをテーマとした「大阪くらしの今昔館」（以下、今昔館）の館長を務めており、かつての大阪の暮らしや住まいを通して次代へとつなげるお話になればと思います。

三浦 今昔館では、ワンフロアで江戸時代後半の大坂の町家を実物大で再現されていて、今日の対話のテーマにはぴったりですね。

増井 大坂町三丁目という架空の町ですが、近世大坂の「町」[*1]の代表例として町並みを展示しています。さまざまな業種の町家が連なる表通り、裏長屋が並ぶ路地など、当時の「町」の空間が再現され、そこで営まれた暮らしや町の運営、人と人との関係なども、しっかり研究し具体的な想定をしているんですよ。単に建物を展示するのではなく、町並みのなかで展開されていた暮らしや、近隣を取り持つ仕組み、人と人との関係性などをわかっていただけるよう

担う「家守」が置かれていました。借家人が納める家賃は町家経営の重要な基盤であり、町にとっても、ひいては都市大坂としても、借家人が安定して暮らせることはとても大切なことだったんです。大坂では、人口の8割が借家人でしたから。

もちろん、こうした仕組みは現代の福祉制度のような理念に基づくものではありません。しかし、町や家主は、生活に行き詰まった借家人に別の住まいを世話したり、夫を失った女性の再出発を支えたりするなど、暮らしを維持するためのさまざまな対応を行っていました。塚田孝[*3]先生のご研究で、いろいろな例が紹介されています。現代の言葉で言えば、包摂的な機能を果たしていたと見ることもできるでしょう。その意味で、私は「巧まざる居住政策」ではないかと思っています。

三浦 私も長屋研究の折、名古屋や大阪などで、昔の大家さんは店子を心配してあれこれ世話したと聞いたことがあります。今の大家さんは住んでいる方の名前は知っているけれど、個人的な情報には立ち入らないで一定の距離をとるなど、共同体のあり方が全然違いますね。

「町」と居住福祉法人 両者に見る包摂の仕組み

三浦 先ほど、包摂という言葉が出ました。落ちこぼれる人が出ないよう、町内でいろいろ世話をする仕組みがまさにそれですね。ただ、長



「大阪くらしの今昔館」に実物大で再現された、江戸時代後期（天保年間）の大坂の町並み。火の見櫓の立つ「町会所」など表長屋が軒を連ねる町通り（写真左側）の背後には、裏長屋（写真右側）が広がっている。写真提供／大阪市立住まいのミュージアム「大阪くらしの今昔館」

工夫しています。

三浦 話のきっかけとして、住まいや暮らしがどう変わってきたかというところから見ていきたいと思います。私の専門である高齢期の居住環境という点では、この50年くらいの顕著な変化は大きく3つあります。ひとつめは「福祉の住まい化」です。かつて福祉施設はどちらかといえば「収容」的な発想でつくられていましたが、介護保険制度が運用開始された2000年頃からグループホームや個室ユニットケアの普及とともに、その人らしく暮らす「住まい」へと大きく変化してきました。

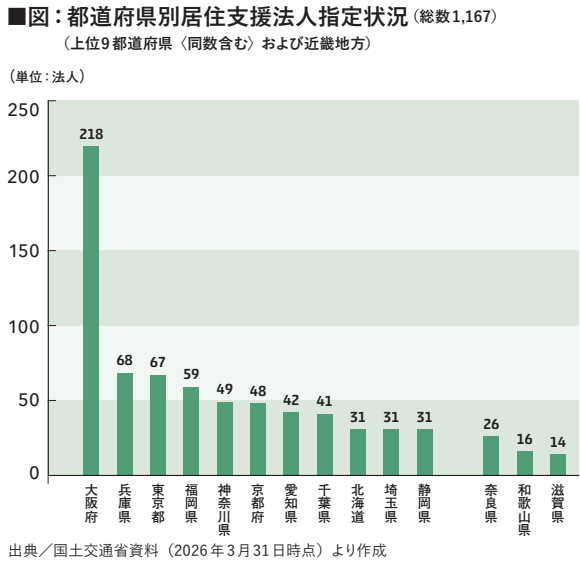
第二に、住宅の方も福祉化している——つまり、住まいに介護や看護が届けられるようになり、福祉施設に近づくという流れがあります。戦後日本の住宅政策は、当初住宅不足への対応が柱で、その後、質的な向上が図られてきましたが、2000年以降は人口減少と高齢化が

進展。核家族、そして単身世帯が中心になる状況のもと、在宅の介護や看護制度は充実しつつも、それだけでは暮らし続けることが難しいという状況が見えてきたわけですね。

そして、この両方の流れが合わり、住宅と福祉をどう統合していくべきかというステージに入っているのが、3つめの変化です。介護の方では、2006年頃から地域包括ケアという言葉で医療・看護、介護という専門職の連携を掲げ、2015年頃からは介護保険の総合事業として当該地域の互助、支え合いの環境づくりに移っています。居住政策も2017年の住宅セーフティネット法[*2]改正の頃から高齢者、障がい者、生活困窮者、子育て世帯も含めて、住宅と福祉を結びつける方向に移っています。つまり、住まいの供給や、福祉政策を住宅に届けるという状況から、住み続けられるために地域の支え合う力をどう引き出していくかに変わっているんです。

増井 高齢単身、ひとり親と子どもというような家族構成の変化のなか、取り残されていく人や適正な居住環境が維持できない人も出てきている。そういう方々に、どう対応していくかも問題になりますね。

三浦 先生のお話をうかがって江戸時代の大坂を振り返ると、町共同体の役割が改めて思い起こされます。当時の町人は家屋の所有形態によって、家屋敷を所有する「家持」と借家人に大別され、場合により、その間に借家の管理を



屋の住民同士が助け合っていたと聞くと、現代の感覚で昔の方がよかった、善意が厚かったと捉えるかもしれませんが、実際にはそうした包摂の仕組みは、厳しい現実を生きるためにあったのかなと思っています。

増井 社会制度を研究する歴史学の立場からすれば、借家人と家主、そして家守という三者の階層差などを社会支配のひとつとする見方もあります。一方、落語に出てくるようなノスタルジックな関係も存在したはずで、「うるさく言いやがって」と思うような干渉もありつつ、常に人として把握され、孤独死やゴミ屋敷もなかったでしょう。プライバシーもなくお節介に干渉される半面、サポートが期待できるような社会体制を感じながら、生きていたんじゃない

かと思っています。

三浦 それで言うと、大阪は居住支援法人「*4」が全国でも飛び抜けて多く、全国の約2割を占めています（図）。これは、大阪の居住文化と関係があるのでしょうか。

増井 お話をうかがっていると、江戸時代の大坂では、町共同体が都市の仕組みのなかで都市と住民の間にあって機能する最も身近な中間的な存在だったことを改めて感じます。現在の居住支援法人のような組織としての形があったわけではありませんが、町、家主、奉行所、さらに加島屋「*5」のように施行「*6」を行う豪商などが、それぞれの役割を担っていました。

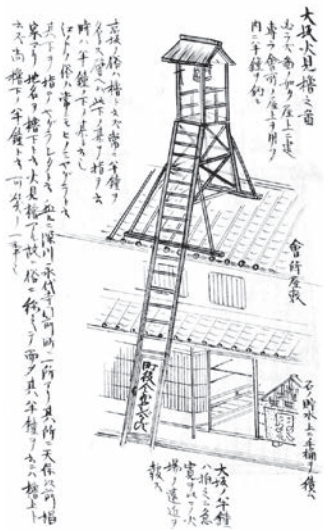
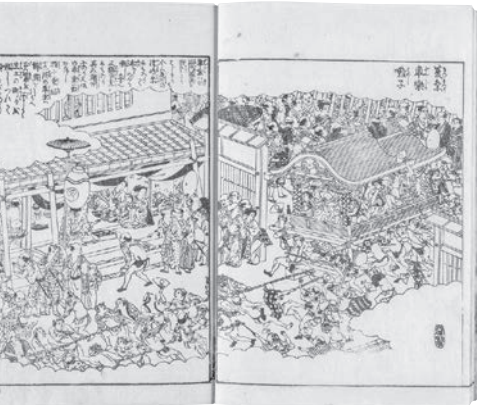
「町」は、住民の暮らしの状況を日頃から把握し、生活に困窮した人がいれば奉行所へ取り次いだり、必要に応じて豪商の施行につないだりする役割も果たしていました。また、米などの救済が行われることもあり、そうした都市の仕組みが、住まいや暮らしを支えるひとつの基盤になっていたのだと思います。

三浦 そう考えると、もう一度当時の仕組みをつくり直すということも必要になるかもしれません。これまでの住宅政策、福祉政策は家族があることを前提にした組み立てだったのが、近年は家族がいなくても地域のなかで暮らし続けられるよう、家族や町内で担っていた機能をどういう形で補っていくかが大きな課題になっています。今ですと賃貸住宅を貸すときに高齢者や障がいのある方、子育て中で多少とも不安定

れる会計のルールがあって、お金の集め方と使い方がきちんと決められていました。引っ越してきたり家屋敷を購入したりした際には町へ負担金を納めますし、さらに借家への入居や新築の際にも一定の負担がありました。また、町の共用施設の貸付収入などもあって、町の運営を支える財政基盤が整えられていたんですね。町用人と呼ばれる町内の広報や清掃をする人を雇う仕組みもあったんです。

三浦 それは知りませんでした。お聞きしていて、コミュニティマネジメントみたいな、顔が見える関係性のなかでマネジメントがなされる仕組みが現代にもあればと思いました。そうした仕組みを町内という形で縛るのは難しいかもしれませんが、そこを現代的にどう再構築していくかという点が、まさしく居住支援法人につながる話だと思いました。

増井 地域と支援法人がどう関わっていくかを考えたときに、フェイス・トゥ・フェイスという側面は重要になってくると思います。江戸時



上／『摂津名所図会』より、町木戸から町内に入る地車（じぐるま=だんじり）。季節ごとの行事は人と人が支え合う関係の土壌ともなった。写真提供／大阪市立住まいのミュージアム「大阪くらしの今昔館」 下／江戸時代の風俗誌『守貞謄稿（もりさだまんこう）』に描かれた会所屋敷の図。それぞれの町の運営は、こうした「町会所」を拠点に行われていた。写真提供／国立国会図書館

な方には、「その後」を心配して大家さんが貸してくださらないことがあります。「その後」の伴走者がセットになって初めてストックが動く状況になっているので、現代における町内的な組織をどうつくっていくかが重要になりますね。

増井 江戸時代は包括的な未分化とでも言うのか、現代における自治会や民生委員というような役割が未分化だった分、包括的な形になっていたのは間違いないでしょう。当時は火事が起こった際や病人が出た時の対応、また町内で捨て子があつた折などの対応がルール化されていて、迅速に行われていました。

ドライなルールで運営された大坂のコミュニティマネジメント

三浦 昔は銭湯とか豆腐屋、米屋など、「そういえばあの人、最近見ないね」と言ってくれる方がいたんですね。今は小さな単位、親族とか友達というコミュニティや社会的関係性にとどまっているところがあります。アメリカの社会学者マーク・グラノヴェッター「*7」は人間関係について「弱い紐帯の強さ」という概念を掲げています。現代のように親しい友人などいっつも会うネットワークだけに頼っていは弱く、少し離れた関係性から得られる情報の方が価値ある情報をもたらしてくれるという話なのですが、そういう意味でも、昔はコミュニティのなかにさまざまなネットワークがちりばめられていたんだろうと思います。

代の町は職住近接で、さまざまな階層の人が住み、町内の会計も回っていたという完結性があつて、都市の仕組みとしては整備されていたんですね。

楽しみながら地域で暮らす「孤立」しない住まいの形

三浦 居住支援法人で特に問題になっているのは、地域のなかで関係性がつくれずに孤立してしまう人が多いことです。看護や介護を届けても、そこがなかなか解決しない。究極の孤立というのは「誰とも話さない」ではなく、「誰からも必要とされていない」と感じるような切り離され方をするので、やはり人は支えられるだけではなく、誰かを支える側に回るのが重要だと思っています。そこで今、高齢介護でも地域に出て有償ボランティア的な活動、「働く」ということを支援する介護保険サービスが出てきています。軽度の認知症の場合、体は動きますから、地域の清掃とかビラ配り、有償ボランティア活動をする。デイサービスの利用者が、入院中の方の自宅の庭で有償ボランティアとして除草を行うなどのユニークな取り組みもあります。

増井 孤立ということ言うと、今昔館の展示を見ていただいてもわかるように、江戸時代の都市構造だと孤立のしようがないですね。町は通りを挟んだ両側にある比較的開放的な建物同士がつくり出すコミュニティで、路地に入れば洗濯場など共用施設の利用の順序や何かで、



認知症スタッフが注文をとることで、オーダーミスも楽しさに変えた「注文をまちがえる料理店」は、デザイン、マーケティングの賞を多数受賞。写真提供／（一般社団法人）「注文をまちがえる料理店」

否が応でも関わらないといけない。プライバシーがないとか、防災上の懸念だとか、ネガティブに捉えられる側面もありますが、そういう地域との関わりのなかで常に人との関係を意識できるということが巧まざる形でありました。

現代ならば、こうした関わりをもちながらプライバシーを保つような空間設計もできると思います。家族のあり方が変わっているからこそ、ハードをつくるときにかつての都市構造の知恵から得られるものがあるかもしれません。

三浦 おっしゃる通りですね。セーフティネット住宅などでもワンルームマンションなどが多く、それ自体の役割は果たすものの、鉄の扉を閉めたら接点がなくなる。やっぱり孤立しているような状況になるんです。その点、昔の住宅にはつながる接点が多く、中間領域的な場の豊かさがあります。そこでのアクティビティが外にはみ出すので、おのずと関係性がつくりやすかったでしょうね。そういうコミュニケーションのしやすさは現代の暮らしでも再現していけるはずだと思っています。

楽しいですし、福祉や地域コミュニティの再生にもつながっていかばと思います。

三浦 地域の生活文化ということで考えると、施設が在宅かという二極になっているのを、まちなかの居場所的なものも活用しながら多拠点多制度による支援ネットワークが、これからは重要になってくると思います。歴史的な場所や地域的なストック、お店など集いやすい場所を拠点として活用していく。居住文化を生かした包摂の組み立てができる時代になるんじゃないかと思っています。

増井 大阪市の住宅政策の一環でもある今昔館のミッションには、居住文化を守り育てていくということがあります。ミュージアムですから、再現された町並みを通して歴史的な関係性を再発見していただく、そこから昔の人のいろいろな知恵を拾っていただくというのがあります。これを拡大していくと、どのような地域でも人が住み、商売をしていけば、そこには文化的伝統が存在すると言える。それは建物や道、空間といったものだけでなく、住んでいた記憶や古い風景とか、わずかでも残っているものの総体を「居住文化」と呼べるはずですし、それを保存、修復する視点が必要ですね。

「町」という社会的仕組みも、現代にそのままもってこれなくても、地域の行事などを何かひとつやってみる。保存、修復、復旧、再生といったいろんな方法を組み合わせることで、居住文化の継承性が保たれると思っています。そ

増井 コロナ禍が住まいに関する価値観を変えるきっかけになり、郊外居住、職住の分離とは違った形で「地域に住む」という方向に転換が進んだように感じます。人々の住まい、暮らしの視線を地域に向けるチャンスだと思うのですが、いかがですか。

三浦 確かに、コロナ禍は住まいに大きな影響を与えました。在宅勤務になったことで、お父さん方が地域にデビューしやすくなり、空き家などをリノベーションして交流の場づくりをする人も少なくありません。建築の素人の方でも情報はインターネットで手に入るので、プロが驚くくらいの専門性をもった方も現れ、従来にない新しいステージになっています。何より楽しみながらやっていることは強いですね。こうした動きがまちのなかで新しい可能性をもたらしています。家が残っている時代ですから、これからは楽しみ方も含めた場の活用法も重要になってくると思います。

増井 場を上手に活用する知恵や、地域居住を楽しむノウハウが広く共有されていくと、社会がもっと変わっていきそうですね。楽しみながら暮らしていくことが福祉的なサポートの基盤にもなると思うと、日本のまちの将来的な展望にも明るい光がさしてくる気がします。

関西のお節介文化が育む 住まいと暮らしのこれから

三浦 生活文化と居住福祉の架橋というこれま

れが今の福祉や包摂性の問題に結びついてくるとすれば、そういった関係性を提供しやすい材料になるはずと、意を強くしました。

三浦 建築家の皆さんにも、活躍を期待したいですね。そこで重要なのは、町内のなかでそういう関係性をつくれるような自己資金の生み出し方です。建築家は建物の目利きができるので、付加価値を上げながらコミュニティに財源が入る形を考え、地域に開かれた場所をつくり、コミュニティを再生していく。とかく関係性が希薄な現代、今までは福祉施設や住宅内でだけつくろうとしていた「誰かが気にかけてくれる」関係性を地域のなかに点在させ、それをつなぐようなネットワーク社会を構想できるのではと思います。大阪は居住支援法人の数にも表れているように、お節介をやりたい、やろうというマインドも強く、それを可能にする力に溢れているのではないのでしょうか。

増井 居住文化を育てるのに、関西人のお節介なメンタリティは強みだと思います。そうした大阪の包容力が、これからの住まいと暮らしをよりよいものにしていくと期待したいですね。

注

- *1 江戸時代の大坂における都市の基本単位。都市・大坂を構成した北組・南組・天満組の「三郷（さんこう）」には約6200の町があった。町共同体は家持を正規の構成員とし、防災・清掃・治安維持・町会所の運営など都市運営の実務を担うとともに、行政と住民をつなぐ中間的な役割も果たした。
- *2 正式な名称は「住宅確保要配慮者に対する賃貸住宅の供給の促進に関する法律」。セーフティネット住宅の登録制度や、家賃補助・改修費支援、居住支援協議会・居住支援法人のサポートなどを骨格とする。

でないテーマで、ワクワクしつつも少し緊張していたのですが、対話を通じてさまざまな示唆をいただいたと感じています。たとえば、今まで福祉的なものが縦割りになりすぎていましたが、これからはもっと創造的に束ねていくような仕組みの必要性を感じました。話題になった、ホールスタッフ全員あえて認知症の方という「注文をまちがえる料理店」[*8]などはその好例で、空間的にもセンスがいいし、料理の味もいい。ただ認知症の方が給仕をするので間違えることがある、それも楽しい、というような価値転換ができるんです。そうした場をもっとつくっていかなくてはと思います。

増井 場の力がある、魅力的なところをどれだけ探すことができるかというのは大切ですね。私が専門とする歴史的町並みの保存でも、この20年ほどで歴史的建造物の活用方法のバリエーションは広がりました。都市の居住文化のなかでモノ（建物）とコト（暮らし）をつなぐというとき、幸いなことに歴史的な建造物はそういう共感を得られやすいんです。

既存の建物は、見方によってとても魅力的なものに変化させることができますが、その際はプロデュースする人が誉め言葉のバリエーションをどれだけもっているか、いいところ探しの力をもっているかが大事になります。そういう意味で、これまでの古い建物のリノベーションや再生のストーリーは貴重ですね。今後そういう手法やボキャブラリーがもっと増えていくと

*3 1954年生まれ。日本の歴史学者。専門は日本近世史。大阪市立大学名誉教授。身分制と都市史研究を中心に、近世の大坂を差別・身分などの視点で研究。

*4 *2の法律に基づき、高齢者・障がい者・低所得者・子育て世帯・外国人などの民間賃貸住宅への円滑な入居を促進するため、都道府県知事から指定を受けた法人。

*5 江戸時代の大坂を代表する豪商のひとつ。精米業から身を起こし、その後は米の売買で発展。のちには大名への融資（大名貸）により、巨大な財を築いた。今日の大同生命保険株式会社の流れ。

*6 大商人や豪商が貧困層に対し、また災害・飢饉の際に米や食料金などを無償で施し与えた救済・社会活動。

*7 1943年生まれ。アメリカ合衆国の社会学者。共同体のなかでの情報の伝播に関する研究で、現代社会学に大きな影響を与えた。

*8 同名の一般社団法人が運営する、ホールスタッフ全員が認知症のユニークなレストラン型イベント。社会参加と生きがいテーマに、オーダーミスも「ま、いっか」の精神で受け入れる寛容の精神を大切に。2017年に初開催されて以来、現在まで全国各地で開催されている。

増井正哉（ますい・まさや）

大阪市立住まいのミュージアム「大阪くらしの今昔館」館長。京都大学・奈良女子大学名誉教授。1980年京都大学工学部建築学科卒業後、同大学院工学研究科博士前期課程建築学修士・工学。京都大学工学部建築学科助手、奈良女子大学生生活環境学部助教授を経て、2004年奈良女子大学生生活環境学部教授。2015年京都大学大学院人間・環境学研究科教授。専門は建築史・文化遺産の保存と活用。歴史的町並みの保存研究、江戸時代の町共同体や祭礼空間の研究、重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）の保存計画のほか、バキスタン・ガンダーラ遺跡、バクタブル（ネパール）など海外文化遺産の保存研究まで、研究分野は多岐にわたる。2021年4月より現職。編著書に『まち抵禦祭すまじ』思文閣出版）などがある。

三浦研（みうら・けん）

京都大学大学院工学研究科建築学専攻教授。工学博士。1993年京都大学工学部建築学科卒業後、日本学術振興会特別研究員を経て、1998年京都大学大学院工学研究科環境地球工学専攻博士後期課程修了（工学博士）。京都大学大学院工学研究科助手、大阪市立大学大学院生活科学研究科准教授、同教授を経て、2016年より現職。専門は人の行動や心理に基づく建築・施設設計の研究。2014年より国土交通省「スマートウェルネス住宅等推進モデル事業」評価委員。2019年より国土交通省の「人生100年時代を支える住まい環境整備モデル事業」評価委員を務める。2004年日本建築学会奨励賞。編著書に『小規模多機能ホーム読本』（ミネルヴァ書房）、訳書に『環境デザイン入門』（鹿島出版会）などがある。